

母子とともに呼吸する木造の産婦人科医院 メリーレディースクリニック（宮城）

仙台市郊外に今年開院したメリーレディースクリニックは、19床の産婦人科医院です。少子化の影響はあるものの、仙台市では毎年約10,000人の赤ちゃんが誕生しています。産科から撤退する総合病院が増え、妊婦の受け入れ先の問題などが取り沙汰されるいま、新たな生命を支える重要な役割を産婦人科医院が果たしています。

「地域の人が安心して出産を迎えられるように、人にやさしい産院を目指しました」と、齋藤創院長。

病院らしくないあたたかさを実現するために「木造建築」にこだわられたとのこと。「耐火制限などのハードルがいくつもありましたが、木造のよさを出せました」と、北洲ハウジングの設計担当、松本哲哉氏。高原のホテルのようなぬくもりのある建物です。

院内設備についても、繊細な配慮が施されています。入院室の大半は洋室ですが、家をあけて入院することへの不安を解消するために、家族と一緒に宿泊できる和室も用意しています。設備面では、トイレ・洗面を全室に設置して気兼ねなく使えるようにすることはもちろん、出湯の待ち時間にまで気を配られています。

また、アロママッサージやカフェコーナーなど、ホテル並みのサービスも充実しています。

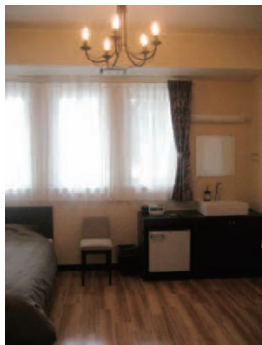
機能重視に偏りがちなトイレについては、床や家具にアクセントカラーをいれたり、アメニティや採尿カップホルダーなどの小物の演出により、女性らしい、癒しを感じる空間になっています。

「普段の生活の延長にある特別な時間」を実現した、母子にやさしい産婦人科医院です。

癒しのトイレ研究会主任研究員 鈴木昭子



クリニック外観。



高原ホテルの客室を思わせる特別室のインテリア。



採尿トイレ。

癒しの環境の一環としての病院トイレ改装 公立邑智病院（島根）

医局長 森田祐司

全国大学病院アンケートでは、アメニティ改善要望の第1位にトイレに関しての改装があげられている。待ち時間や診察時間、会計など病院滞在時間はかなりの時間となり、その間にほとんどの人がトイレを使う。病院で必ず訪れる場所ならば、その環境整備は必須である。私自身、癒しの環境研究会に所属する笑い療法士2級である。笑い療法士は患者の緊張緩和に努め、笑える環境を整えることも大事である。病院に向く患者のほとんどがトイレに行くなら、そこにも癒しの環境は必要である。

過去のトイレにおいて、ことさら病院においてはトイレ内の環境は劣悪であったと思われる。できるだけ早く済ませて立ち去ろうと考えるのが人情である。しかし、病院では健康な人はほとんど利用しない。なかなか立ち上がれない患者や、車いすなど、日常的に介護を必要とする人が病院トイレを利用することが多いのである。

臭く、せまく、暗い、汚い四重苦というストレスのある状況ではトイレに癒しは存在しない。ストレスがあると緊張は緩和されず、笑うための準備が整わない。トイレも明るく、広く、きれいに整備することでストレス緩和を目指し、患者に癒しの環境を整備することが必要である。

当院は、平成18年から、3K（くさい、きたない、くらい）撲滅運動を開始した。様々な院内整備がなされ、トイレも大幅に改装し、照明を明るく、スペースを広くとり、「高齢者に優しいトイレ」をコンセプトにした。公立病院であるため、予算等の確保など諸問題が存在するが、管理者、院長にも先述のような考えを理解して頂いた。

患者からの評判も上々で、私自身も診察の合間に患者からトイレについて非常に良くなったとの言葉をよく頂くようになった。トイレの整備ひとつで病院のイメージも改善され、患者に癒しの環境を提供できたのではないかと考える。



新しくさわやかになった外来トイレ



3Kが駆逐された女子トイレ